文學士　小原要逸編

對譯英米名家詩抄

第三集　虹のかげ

《定價金參拾錢》

文學士　小原要逸編

對譯英米名家詩抄

第三集　虹のかけ

《定價金參拾錢》

文學士　小原要逸編

對譯英米名家詩抄

第三集　虹のかげ

虹のかげ

ひと日御空に虹いと麗はしきを望みて、ざえもなき若人のおのれ畫匠にもあらぬを、繪具とり出でゝもろもろの色合せ試みつゝ、ひたすら空うち仰ぎて虹の七色寫し出さむとぞしぬる。幾度か筆なげ棄てつ、幾度か紙張りのべつ、辛くも成りしは見るから涙ぐまるゝ拙さに、われ知らず俛首るれば、睫毛のあたりきらゝに麗はしき彩の旬、あなやと見やる御空に虹は消えて、そがかげのみはてしなうまぼろしにたちぬとぞ。かゝることわれにもいと多かり。この一巻の如きもあはれそのたぐひならずとせんや。

目次

路得　フード……一
ユーリン公の姫　カメル……三
三人の漁夫　キングスレー……六
轉又變　ブラウニング夫人……七
兒の碑銘二篇　コールリッヂ……八
ポーヂシア　クーパー……九
メリー、ラッセル、ミットフォード女史に呈す……九
哀樂　ホワイト……一二
無心の蘆　ブレーク……一三

The Battle of Blenheim.

辯解　エマーソン……一七
いましが泣くを　バイロン卿……一八
花薔薇　コールリッヂ……一九
わが身譬はゞ　ウヰルヂ……二一
ヘスペラス號の難破　ロングフェロー……二二
二人の姫御子　テニソン卿……二七
兒等の叫び　ブラウニング夫人……二九
クブラ汗　コールリッヂ……四〇
無常　シェレー……四四
さらばよ　バーンス……四五
ブレンハイムの戰　サウジー……四六

路得

トーマス、フード

胸より下は
　麥に小隱れ、
黄金の光り
　あびし姿は、
輝やく接吻
　身に得て立てる

小原無絃

照る日の神の
　戀女さながら。
片頰にうくる
　秋の日ざしの
深く熟めるを
　譬はゞ、それよ、——
日にくろみたる
　頰の漲紅か、——

麥間に咲ける
眞紅の罌粟花か。

眼に垂れたる
髮の黑きを
譬ふるに、もの
あらざりけりな。
さはいへ、長き
睫毛ありてぞ
つよき光りも
華やぎそふる。

かざす編笠
緣ほのぐろく、
垂髮かゝる
額に影しぬ。——
神を讃へて
姿やさしう
かくこそ、麥の
うちに立ちたれ。

思ふに、天は
わが刈るところ、
落穗拾へと
のみは思さじ。
汝が束おけよ、

來りてともに
收穫せずや、
家庭に入れよ。

ユーリン公の姫

トーマス、カメル

山地へいそぐ酋長一人
叫びぬ、『舟人よ、ためらふな。
みどもを漕いで渡しなば
白銀さはにとらすべし。』

『荒れ立つ暗のロホガイル、
渡せとのるはそもや、誰。』
『あはれ、ウルバの島長よ、
ユーリン公の姫君よ。
『落ちのびてよりはや三日、
姫の父こそ追ひ來なれ。
谷にてわれの見つからば、
血は野の花を染めむのみ。
『その騎馬の勢いと近し、
わが足跡の見つからば、

身は惜まねど、なきあとの
　花嫁を、誰、なぐさめむ。』

島の荒夫は叫びたり、
『いざ、我行かむ—いざ來ませ—
白銀ならで、いぢらしの
　姫のおんため行かむのみ。

『げに危さにある鳥の
　何、ためらうてよからんや、
白う浪立ち荒るゝとも、
　彼岸に渡しまゐらせむ。』

言ふ間に風は荒れまして、
　水鬼の叫びものすごし。
かき曇りたる天暗く、
　顔もかたみに見えわかず。

吹きしく風のいや荒れて
　夜ものすごくなり増しぬ。
擐甲へる人の谷くだる
　駒の足掻の音ちかし。

姫は叫びぬ、『やよ、急げ、
　よしや、嵐の吹かば吹け、
空の荒れには會はんとも、

怒れる父に會ふべしや。』

舟は岸をば離れたり、
　舟、荒海に乘り入りぬ、—
あはれ人手にあまりたる
　強き嵐は吹き捲きぬ。

みなぎり荒るゝ大浪の
　うちに乘り入る舟の人。
岸に着きたるユーリン公、
　忿怒、悲愁にかはりけり。

見れば、嵐と暗のそこ、
　いとしき兒こそ浮ぶなれ。
片手をあげて救助呼び、
　片手、戀男を卷きたりな。

公は叫びぬ、『歸り來よ、
　この荒海をわけて來よ、
山地の酋長を宥さなむ、
　あはれ、むすめよ、わが姫よ。』

甲斐もあら濤、岸拍ちて
　救助もならず、歸られず。
忽ち浪は姫呑みつ、
公はくづほれ、立てるかな。

三人の漁夫

チャールス、キングスレー

三人の漁夫は入る日と共に
西へと遠く、西へと遠く、
戀しき妻に心のこして
漕ぎぞ出でつる、いとしき子等は、
町はづれまで送りぞ行きし。
男は稼ぎ、妻は泣けども、
獲物は稀に、家族は多し、
磯拍つ浪のおとのみ高し。

三人の妻は燈臺にのぼり、
入る日と共に燈を點火ぬ。
三人の妻は嵐に憂ひ、
三人の妻は雨に患ひぬ。
一夜、黑雲おどろに飛びぬ。
男は稼ぎ、妻は泣けども、
忽ち風に蒼溟荒れて
磯拍つ浪のおとのみ高し。

汐退きしとき、朝の光りに、
輝やく濱に三人の亡骸。
とはに町なる家にかへらぬ
三人の漁夫の亡骸めぐりて
手をとりかはし泣きに泣くなり。

男は稼ぎ、妻は泣けども、
過ぐるも疾し、疾く眠らむ。
さらばよ、磯よ、磯拍つ浪よ。

轉又變

エリザベス、バレット、ブラウニング

野を行く水の岸もせに
百合の咲きてし五月前、
袂つらねしこのところ。
今、水に沿ひ、籬に傍ひ、
君訪ひも來ず、雪深し。
あゝ、戀人よ、愛づるとも、
　行くとも君が任意なれや。
君來ることのあらざれば、
水は凍りて聲もなし。
花枯れ果てつ、根も枯れつ。
かくも、ながめは變りしに、
あやしや、君がうつろひの
　少きをこそ寧ろあやしめ。
雪ひら〳〵と落つるごと
涙わが目に浮びたり。
君が讃へしそのかみの

頰のくれなゐは褪せ果てゝ、
今ほの青き色をなす。
あゝ、戀人よ、ほむるとも、
　行くとも君の任意なれや。
わがかんばせはほの青し、
君はちかひを破りたり、
忠實ならざりき、君が愛。
かくもわが生は變りしに、
あやしや、われがうつろひの
　少きをこそ寧ろあやしめ。

兒の碑銘（二篇）

サミュエル、テーロー、コールリッヂ

天惠えし兒は
　薫る唇を
母の乳房より
　離してゆるめ、
啜り飽きしとや、
　やをら罪もなの
太息つくことの
　嬉しげなる哉。
さりやな、わが兒の

最後の太息や。
おゝ、語れ、石よ、
　此處過ぐる人に
茲に麗はしの
　乳兒横たはりて
死ぞ、子守唄を
　歌ひ聞かしぬと。

兒の碑銘

なほ、罪業にけがされず、
なほ、憂愁を知らざるに、
死はやさしくも來りけり
ひらき初めたる蕾をば
天つ御空に移し去り、
咲き薫れよと命じけり。

ボーヂシア

ウヰリアム、クーパー

ブリトン治らす勇武の女王、
　羅馬の鞭に血汐垂れつゝ、
悲憤の涙はらひもあへず、
　その國神の託宣乞へるに、

枝延び張れる樫の木蔭に
髪眞白なる僧ぞすはれる。
その言ふ燃ゆる辭句悉く
忿怒に滿ちぬ、悲痛を帶びぬ。

『陛下よ、老いの目にも無念の
涙は垂るゝ御身の上や、
御國思へば怨恨切に、
言はんとするも舌は動かず。

『羅馬滅びむ——その流したる
無辜の血汐に赤くしるせよ。

忌まれて滅び、復たつなけむ、
その罪惡は鬼神もゆるざし。

『千市百州蹂躙りて建てし
帝國四海を併せ得しとも、
ほこりは墜ちて地にや塗れむ。
聽け、ゴールこそ其門に迫れ。

『武人のほまれに心とめざる
羅馬人こそ競ひおこらめ。
千古消えざる讃美享くるは
武にあらずして文なるべきぞ。

『奮起、われ等の森をば出づる
われ等の後裔のたのもしき哉。
電雷を提げ、羽翼を振ひ、
世界を廣く領ずべきかな。

『シーザル王もなほ知らざりし
國に君臨むは陛下の子孫。
鷲の羽風に靡き伏してし
國も御軍迎へ伏すらむ。』

調はゆかし、琴は畏こし、
詩僧絃をばかい鳴しつゝ、
身を折り屈げて仰ぎ奏せし
天火に燃ゆる預言はしかぞ。

おみながらも王者たる身の
胸に入りては輝やく言葉。
矛とらしゝも、天か、非運か、
敵に叫びし最後の預言——

『聽けや、傲慢、非道の兇徒、
天罰くだる遠きにあらじ。
すめら御國はわれ等獲たるも、
耻辱と滅亡は汝等待てるぞ。』

メリー、ラッセル、ミットフォード 女史に呈す

その花園にて

エリザベス、バレット、ブラウニング

われ、今、君のあしもとに
この調をばさゝげなん、
こゝろ優しきわが友よ、
『この「花」をこそさゝぐれ。』と
高き詩人が言ふごとく
さは誇りかにわれ言はじ。

花と呼ばんか、おそらくば
君がたへなる花薔薇を
なべて瀆すにあたるをや。
あゝ、このごろの美し日を
君また薔薇の壇に凭り、
その花、夏にひらくごと、
心を愛にひらきつゝ、
『根さしいやしき歌だにも
わが花のごと天眞を
失ふことのなからずば、
麗ならずともなか〳〵に
天の光りにとゞかん。』と
君、さひはひに繰りかへせ。

親しき友よ、みこゝろの
しづけき君の歌なれば
筆のにほひに露散らん、
風もそよ吹き薫るべし。
あはれ、めなれし題とりて
聖き法をば說きつゝも、
世界をよろこびに導くは、
自然についでそれ君か。

哀樂

ヘンリー、カーク、ホワイト

一

夕榮は地をとざして、
暮の鐘ひゞきわたりぬ、
一つ、二つ、三つ、四つ、五つ。
書を讀む窓にすはりて、
亂れくる千々の思ひに、
幸あれとわれこそ祈れ。

二

靜かなる思ひは清く、
聖き火を胸におぼえて
　人しらず娛みつゝも、
兩の眼に涙うかびぬ、
われたのし、さはれ悲しき
　その所以を告ぐるよしなし。

三

歡樂の光りか、人魂か、
白銀の雲飛び去るが
　わが胸をかきや亂せる。
學生のわれ何なさむ、
泡沫の人の才もて、
歡樂の消ゆる幕もて。

四

茲にわれ停まりあるも、
木々青き彼の丘越えて、
　ひとり行く途あるためか。
さにあらじ、われに爐あらば
行く方の何處なりとも、
　すべて皆わが宿たらむ。

五

そも汝れが耳聾ふるとき、
絃の音の空をもこむる
　高樓のなほあるためか。
さにあらじ、おゝ、さにあらじ、
恐怖よりわれ救はれて
　御空にて神とあらなむ。

六

何處より、そは知らねども、
ある奇しの言の葉ありて、
　喜べばわれを遮ぎる。
如何なれば、はた、何故に
悲しむか、われ眞に解せず、
　たゞ涙眼にぞあふるゝ。

無心の蘆

ウヰリアム、ブレーク

心のどけく笛吹いて
　ひとり峽をくだりしに、
見れば雲間に童あり、

ゑみつゝわれに謂ひけらく。—

『羊をまもる曲吹けな。』
われ、喜びて吹き了へぬ。
『君、その歌をまた吹けな。』
吹けば聽きつゝ泣けるかな。

『置けよ、たのしき汝が笛を、
たのしき歌を歌ひてよ。』
われ、また歌を歌へるに
聽いてうれしと泣けるかな。

『あゝ、世の人の讀まんため、
君よ、すはりて書きつけよ。』
見れば童は消え去りつ、
うつろの蘆をわれ摘みつ。

かりのすさびの筆としつ、
清き水をばにごらしつ、
たのしき歌を書きつけぬ、
童や聞きてよろこばむ。

辯解

ラルフ、ワルドー、エマーソン

林に、谷にたゞひとり
われ入るとても、忠實ならじ、
荒しとばかり思はざれ。
森の神をばとめ行きて、
御言を人につたへてむ。

かひなを拱みて小川べに
われあるとても、懶怠に
耽けるとばかり責めざれな。
空に浮べる雲は皆
わが書の面に文字をかく。

彩なき草の花摘みて
われ歸るとも、野の人よ、
叱り、のゝしること勿れ。
手なる紫苑も悉く
思ひを載せて餘りあり。

何の神秘かこれあらむ、
姿を花にかれるのみ。
そもまた何の、人しらぬ
秘めの歴史のこれあらむ、
梢の鳥のかたるのみ。

汝が有つ田より收穫を
つよき雄牛は背に積みて
家路を遠く來るなり、
汝が穫し二度の收實をば
われは歌にぞあつむなる。

いましが泣くを

ロード、バイロン

いましが泣くをわれ見たり——

涙きらゝに輝やきて
青きその眼にあふれつゝ、
露したゝらす花菫
それに似たりと思はれぬ。
いましがゑむをわれ見たり——
光りめでたき青玉も
そゞろに色をうしなひつ、
あはれいましの眼に滿てる
生ける匂ひにおよばんや。

彼方、入る日のかゞやきの
なごりを受けて炫え立ちし
微醉ふかき天雲の、

夕うすやみに鎖されて
なほ御空より消えぬごと
その微笑はあえかなる
心に淨きよろこびを
分ちあたへつ、輝やきは
胸を照らしつ、とこしへに
消えぬ光りをのこすかな。

花薔薇

サミュエル、テーロー、コールリッヂ

園生のほこり、妙に咲く
花ことゞくわれ摘みつ、
薔薇のうてなの底深く
眠れる「戀」をうかゞひぬ。
その額めぐり七彩の
玉の冠のかゞやきつ、
露に醉ひたるその頰は
ひたむらさきに光るかな。

かをる休息を破らじと
　靜かに「戀」をとりあげつ、
淨きサラ子が胸の上に
　花もろともにそと置きぬ。

はかられたりと氣も付かず、
　妙のとりこは目を覺し、
のがれ去らむともがきつゝ
　妖しき足をあしずりぬ。

うつゝともなき光景にぞ
　こゝろ短かき子も服し、
あはれ、嬉しとをたけびて
　快樂に堪へず羽ばたきぬ。

かくて叫びぬ。『何かそも
　この玉座をばかく魅せる。
ベヌスは他處に「戀」を獲よ。
　われこそ此處を領じてめ。』

わが身譬はゞ

リチャード、ヘンリー、ウヰルヂ

一

わが身譬はゞあけぼのゝ
空に匂ほへる花薔薇か。
ゆふべの影を待ちもえず、
地にこぼれて亂るれど、
「夜」は看るだに悲しとや、
薔薇のやさしき牀もせに
露かぐはしく置き滿てぬ。——
あゝ、わがために一雫、
涙を誰かそゝぐべき。

二

わが身譬はゞ月影の
青きにふるふ秋の葉か。
梢はなれてはかなくも、
落ちてはやがて朽ちぞ去る。
さはれ、その葉の落つるとき、
親樹は影を悼みつゝ、
葉なき樹を風かなしみぬ。——
あゝ、わがためにしばしだに
歎息を誰かもらすべき。

三

わが身譬はゞ荒濱に
踏みのこしたる足跡か。
汐滿ちくれば眞砂より
洗ひ去られてあともなし。
さはれ、寄せくる荒海は
蒼民草の絶えゆくを
愁ふるさまにどよむかな。——
あゝ、誰ありてわがために
あと弔らひてかなしまむ。

ヘスペラス號の難破

ヘンリー、ワヅワース、ロングフエロー

一

冬の荒海すゝみ行く
船あり、帆船ヘスペラス。
その船長はまなごなる
小さき女兒をともなひぬ。

二

眼は亞麻花よりも靑くして、
頰はあけぼのゝ紅を帶び、
胸は皐月の山楂子の

薫る花よりいやしろし。

三

彼の船長は舵機のへに
煙管くはへて凭り添ひつ、
西に、南に、はやかぜの
吹き去る煙を見まもりぬ。

四

西班牙洋を乘りしてふ
老いたる水夫ぞ語りける。——
『颶風きたるのおそれあり、
ちかき港に入り給へ。

五

『昨夜、月の輪は黃金なし、
今宵、御空に月はなし。』
あざみ顏にも船長は
煙を吹きつゝほゝゑみぬ。

六

北東より吹き來る
風いや寒く、いや强し。
雪さへ海にみだれつゝ、
浪沸きかへり、荒れ立ちぬ。

七

しけは來りぬ、沖遠く
船をば流し、吹き捲きぬ。
船はゆらぎて物怖ぢし
駒さながらに停まりぬ。

八

『いざ、來よ、來よや、わが女兒、
さまてに震ふことなかれ。
しけに會ひしもいく度か、
かゝる疾風の何かある。』

九

膚刺す風のつよければ、
水夫の上着を着せかけて、
破れし船具の綱切りて
子をばマストに結ひつけぬ。

十

『おゝ、父上よ、鐘鳴るは
おゝ、何事のありてかよ。』
『荒岩磯の霧鐘ぞ。』
父は沖へと舵把りぬ。

十一

『おゝ、父上よ、砲音は

おゝ、何事のありてかよ。』
『この荒海になやみたる
船の救助を呼ぶ音ぞ。』

十二

『おゝ、父上よ、きらめきは
おゝ、何事のありてかよ。』
父は答へず、こほりたる
亡骸の如く身動がず。

十三

うごかぬ舵機に身を倚せて
父は空をば仰ぎけり。

雪をかすめて照る灯影、
見つむる眼を射たりけり。

十四

今や、女兒は手をあはせ、
救はれましと祈りつゝ、
ガリレの湖の浪をさへ
しづむる神を念じたり。

十五

夜半の眞闇をつんざきて
みぞれ、吹雪をかきわけて
妖怪のごとく彼の船は

暗礁のかたに流れたり。

十六

はやてのあひに小やみなく
陸より音ぞきたりける。
そは荒磯にうち寄する
濤のどよみのひゞきなり。

十七

濤は船首におし寄せて、
あへなく船はたゞよひつ、
水は船人をば甲板より
氷柱のごとく捲き去りぬ。

十八

羊の毛よりいや白う、
波しづかなる蜜なれど、
怒れる牛の角のごと
岩は船腹をばつらぬきぬ。

十九

氷にとぢし帆桁さへ
マストと共にうち搖らぎ、
玻璃なす船は沈みけり。
あゝ、あゝ、濤のどよむのみ。

二十

しのゝめ、荒るゝ磯濱に
一人の海士はたゝずみて
マストのさきに縋りたる
美し少女を見たりけり。

二十一

うしほは胸に凍りたり。
うしほは眼をとざしたり。
波のまに〳〵浮き沈む
海藻に似たる髪を見ぬ。

二十二

雪ふる夜半にヘスペラス、
破れしさまはかくなりき。
神よ、暗礁のこのごとき
死よりわれ等を救へかし。

二人の姫御子

ロード、テニソン

ミンニ、キンニの姉妹は
貝のうちにて睡りたり。
睡れ、ちひさき姫御子よ。

かくて二人はいのねたり。
貝の内面は石竹花や、
貝の外面はしろがねや。
おほ海原の波音は
貝をめぐりてさまよひぬ。

睡れ、ちひさき姫御子よ。
日をすみやかに覺さゞれ。
反響は遠く月さして
かはる〳〵に消え入りぬ。
匂ひすゞしき星ふたつ、

貝のうちをば窺ひぬ。
『あはれ、何をか夢むらむ。
あはれ、誰が子か語り得む。』

たちまち覺めし紅雀、
畑のすみより飛び出でぬ。
覺めよ、ちひさき姫御子よ。
豐榮昇る日は高し。

兒等の叫び

エリザベス、バレット、ブラウニング

一

兒等はゝさなし、悲愁の
あるてふ老いにあらずして、
はやくも泣くを聞くか、君。
わかき頭を垂乳根の
母の御胸に倚せながら、
落つる涙をとめえじよ。
あゝ、子羊は野に呼べど、
子鳥ねぐらにさゝ啼けど、
鹿の子は影に戯るれど、
咲きしばかりの草花は
西吹く風にさゆらげど、
をさなき兒等は、おゝ、君よ、
聲をかぎりに泣けるなり。
かく、もの皆はほだしなく
野べに、山べにうち連れて
遊び興ずるこのごろを、
兒等のみひとり泣けるなり。

二

そも、如何なればその涙
しかく落つると悲愁に
沈める兒等に問ふか、君。

あはれ、老人はありし世と
逝きし昨日の戀しさに
思ひをかけて泣きもせむ。
森の古木は葉をとめず。
ふるどし霜に盡きんとす。
古き創こそいとゞしも
もし撲たれなば痛からむ。
ふりし希望ぞなか〳〵に
すつるに難きならひなる。
それにはあらず、いと若き
かの兒等はそも如何なれば
この幸おほき祖國にて
母の胸乳の前に立ち、

しかく泣くぞと問ふか、君。

二

あゝ、蒼ざめてやつれたる
顏をぞ兒等はもたぐなる。
その悲しげのおもゝちを
いかで見るだに忍びんや。
うき人の生の憎むべき
憂愁はかくもをさな子の
もろ頰の紅をかすむるか。
兒等は言ふなり。『卿等の
ふりたる世こそ淋しけれ。
われ等の足はいとよはし。

行くこと數歩ならずして
たちまち疲れはつるなり。
墓の安息をしたふとも
あまりに遠し、覓めえじ。
そも如何なれば泣くかとは
兒等に問はざれ、老いに問へ。
われ等の泣くは外界の
寒きためのみ。おもほへば
われ等をさなきもの等には
適く所なく、外に立つも、
墓は老者のためにあり。』

四

兒等は言ふなり。『眞にさなり、
われ等も時に夭くして
死に得ることのありもせむ。
小さきアリスは去年死にて
霜の下なるその墓は
さながら雪の球なせり。
その亡骸をいれんとて
堀りたる穴を見たりしに、
四方たゞ土にとざゝれて
室と云ふ室あらざりき。
小さきアリスはうまいして
臥せるを誰かさまさんや。

『小さきアリスよ、やよ、覺めよ、
夜はほの〳〵と明けたり。』と。
君ひねもすを墓の上に
耳傾けてあるとても
アリスは應答せざるべし。
われ等も今はその顏を
見るともそれと知らざらむ。
兩のひとみは微笑の
浮ぶる時のあればなり。
アリスは死衣に包まれて、
靜かに寺の時告ぐる
鐘を聞きつゝ、分秒も
心たのしうすごすなり。

あはれ、われ等も天くして
死なましものと希ふなり。』

五

あはれなる哉、をさな子よ、
兒等はこよなき幸福と
生裡に死をば覓むるよ。
兒等はこゝろを墓底の
その蠟布より去らしめず、
却て、これをむすぶなり。
やよ、出で行けよ、をさな子よ、
炭坑よりも、都市よりも、
つぐみの鳥が啼くがごと

歌うて出でよ、をさな子よ、
摘めよ、牧野のさくらさう。
高く笑へよ、ゆびさきも
さらば笑ひを感ゆらむ。
さもあれ、兒等はたゞ言ふよ、
『卿等の謂ふ牧の野の
さくらさうとは坑のべの
かの葦芦に似たらずや。
乞ふ、われ等をば坑底の
眞闇のうちに殘しおき、
思ふがまゝに卿等は
その歡樂をつくせよや。』

六

兒等は言ふなり。『あゝ、われ等
疲れはてたり、はしり得じ、
はた又、飛びも能はじよ。
われ等牧野を戀ふること
若しありとせば身を臥せて
しばし眠らんためのみよ。
われ等が膝はいとゞしく
ふるひ慄き立ちもえず、
行かんとすればなか〳〵に
われ等はつちに倒るなり。
われ等の重く慵き眼には
眞紅の花も雪のごと

たゞ白うこそ見ゆべけれ。
われ等ひねもす、いそしみの
重荷を曳いてつちぐこの
坑の眞闇をあゆむのみ。
さらずば、ひと日、工場に
眞鐵の車輪まはすのみ。

七

『あはれ、日ねもす、轔々と
眞鐵の車輪うちめぐり、
その生溫き風はたゞ
われ等の顏をはらふなり。
われ等の心うちめぐり、

燃ゆるが如くおもはるゝ
われ等の頭うちめぐり、
震ふ窓より軒高き
天つ御空もうちめぐり、
壁の上より射し落つる
長きひかりもうちめぐり、
天井の蠅もうちめぐり、
日ねもす、ものは皆めぐり、
われ等も皆ともろともに
小やみだになくめぐるなり。
眞鐵の車輪轔々と、
日ねもす鳴りてやまぬなり。
されば、われ等も時として、

「あはれ、眞鐵の車輪、やよ、
めぐるをやめて今日のみは
靜かなれや」と雄詰びて
祈禱さゝぐることあれや。』

八

あゝ、靜かなれ、兒等をして
かたみに呼吸を聞かしめよ。
この人生やさしき春の氣の
靉靆きわたる野べにして
かたみに手をばとらしめよ。
寒き眞鐵の運動は
神が造りし、默示せる

人生にあらざるを知らしめよ。
あはれ、眞鐵の車輪、やよ、
爾が中に生き、爾が下に
生くるは人間本來の
意義にあらぬを知らしめよ。
朝より夕にいたるまで
眞鐵の車輪うちめぐり
高きよりこそ生命をば
おろしてこれを挽き碎き、
神のみひとり、兒等の魂、
心を天にさそはんと
なし給ふにもかゝはらず、
眞闇のうちに挽き去らる。

九

あはれ、をさなき痛はしの
兒等にすゝめて、おゝ、君よ、
神仰がしめ、いのらせよ。
御惠みふかき神なれば
よろづのものに幸福を
降し給はんその如く
何時かは兒等をあはれまむ。
兒等は言ふなり。『黑鐵の
車輪とゞろきひゞくとき、
われ等の聲を聞くといふ
神とはそもや誰なるぞ。

われ等が聲を張りあげて、
むせぶも人は過ぎ去りて、
われ等の聲を聞きもせず、
また一言もいらへせず、
さなり、われ等も炭坑の
(眞鐵の車輪とゞろきて)
口なる人のことゞを
聞きえざるなり、その如く
神もわれ等のうら泣くを
また如何にして聞き得んや。
天使は神をとりかこみ
歌をかなでゝあるといふに。

十

『さなり、われ等は祈らんに
二つの言葉記憶えたり。
しかも痛苦の眞夜中に
「われ等の父。」と室のすみ、
天を仰いでたゞかろく
呼びてみづからなぐさめど、
「われ等の父。」と呼ぶのほか
また一言を知らじかし。
思ふ、天使の歌斷えて、
神はしづかに氣を澄まし
「われ等の父。」のふたことを
強き右手にや握るらむ。

かくて、われ等の聲聞かば
(神はやさしく善しといへば)
清くゑみつゝ、せちがらき
下界をのぞみ、「わが兒等よ、
來つてわれともろともに
いざや、休息め。」と答へなむ。』

十一

兒等はひとしほ泣いて言ふ、
『さるを然らず、物言はず、
神こそ石に似たりけれ。
われ等を使役ふ主人こそ
神のかたちと人は言ふ。

よしんば天に行くとても
われ等はたゞに慘として
眞鐵の車輪さながらに
めぐる雲をば見得んのみ。
嗤ふを休めよ、かなしみは
うたがひ深くなさしめぬ。
われ等が神ををがまんと
仰げば涙はふり落ち、
眼もかきくれて見えじかし。』
おゝ、君、君が說くところを
兒等難するを聞きたりや。
神の力はいつくしむ
下界のさまを見ば、それと
明かならむはずなるに
兒等はよろづの物事を
ふかく疑ひ、あやしむよ。

十二

兒等の泣けるを君見よや。
走る以前より、はや、すでに
かれ等は疲れ、倦んじたり。
かれ等は日をも見ざらむに
などや、日よりもいやあかき
榮の光りを知るべきや。
人生の悲愁は知れらんも、
知惠をば知らぬかれ等なり。

人生の絕望に沈むとも、
やすらひ知らぬかれ等なり。
かれ等はそれよ、自由なき
キリスト敎の奴隸なり。
かれ等はそれよ、功もなく
たゞ、くるしめる殉敎者。
かれ等はそれよ、年經れば
朽ちてあとなき蛆なれや。
あゝ、天地の愛よりは
みなし見たりしかれ等なり。
こゝろのまゝに泣かしめよ。
こゝろのまゝに泣かしめよ。

十三

あゝ、蒼ざめてやつれたる
顏をぞ兒等はもたぐなる。
その悲しげのおもゝちを
いかで見るだに忍びんや。
兒等は天使を人のごと
思へるのみか、上帝を
肉眼をあげ、見なんとす。
兒等は言ふなり。『何時までか、
そも卿等は世界をば
動かさんとてをさな兒の
こゝろの上に立ちあがり、
擬甲へる足をふり上げて

その呼吸の根をとめつゝも、
玉座をさして市もせに
練り行かんとは思へるぞ。
おゝ、暴君よ、わが曹の
血汐はたかくほとばしり、
卿等が着るむらさきの
御衣はみちを示すなり。
さもあれ、稚兒の嗚咽こそ
怒れる強き人よりも
靜かに、深く咀呪ふなれ。』

クブラ汗

サミュエル、テーロー、コールリッヂ

快樂つくさむ、いざ玉の
御殿つくれとクブラ汗、
おのが知らせるクサナヅの
民に御言をくだしたり。
聖き川なるアルフ川
その國遠く流れ來て、
人に知られぬ洞窟の數
くゞりて暗き海に入る。
されば百里の肥沃の地
めぐりて、眞壁、あらゝぎは

たちまち高く築かれぬ。
園をうねりて涓流は
ひかり輝き、花咲ける
木々のかをりはいと高し。
神代ながらの叢木立、
日光みちたる綠野を
こめてさながら山なしぬ。

さはさりながら、杉叢を
はすにみどりの丘斷てる
ふかき怪異しき岩淵よ。
魔つ戀人こがれつゝ
なげき愁ふるをみな子が、

月かなしげの夜なゝを
迷ひや來むと思はるゝ
靈しく奇しき荒場よ。
小やみだになく岩淵は
沸き立ちどよみ、さながらに
地球が喘氣いと急に
息吹くが如くときじくも
おほい泉ぞほとばしる。
たばしる霰、あるはまた
打つ連枷の下に飛ぶ
糠さながらに巨大なる
巖のかけら亂れ飛ぶ。
亂れ飛ぶその岩の間を

忽ち流れ、また堰きつ、
とはに絶えざる瀬をなして
聖き川こそはしり行け。
巌をくだき、濤をあげ、
森をつらぬき、谷を過ぎ、
うねり、うねりて半百里、
聖き川こそ流れ行け。
人に知られぬ洞窟の數
かくて、くゞりて末遠く
非情の蒼溟の底深く、
洶湧としてしづみ行く。
その洶湧のひゞきにも
クブラは遠く、たゝかひを
預言ち給ふいにしへの
祖宗の聲を聽けるかな。

金碧燦たる殿の影
波のもなかに浮びけり。
泉、いはやの鳴りひゞく
聲は此處にも聽こえけり。
氷のとざすいはやもつ
日光みちたる快樂殿、
あゝ、これ、人のたくみもて
人のつくりし靈異のみ。
あゝ、われ曾てまぼろしに
五十絃をば手にもちて

立てる乙女を看たりけり。
そのアビシニアの少女子は
その五十絃をかい鳴らし
アボラの山を歌ひけり。
今、もし、われがその歌の
妙のしらべを思ひ出で、
むかしのまゝの歡樂を
心にふかく甦しえば、
あはれ、御空にかの殿を、
氷のとざすいはやをも、
高く絶えざる樂をもて
われは築ぐをえもすべく、
聽きたるものはおしなべて
それをば其處に見とむべく、
おゝ「戒め」よ、「戒め」と
口をそろへて叫ぶべし。
光りかゞやくその眼は、
風に流るゝその髪は、
三たびその身をうち繞り
一つの輪をば織りなさむ。
聖きまなざしひらめかし
汝れ等が眼を閉ぢしめむ、
彼れは甘露にいきたれば、
樂園の乳を飲みたれば。

無常

バーシ、ビッシ、シェレー

今日咲む花も
　明日は枯る。
停まれと祈るものは皆
人まどはして翔り去る。
この世の快樂そもや何。
夜闇をあざける電光か。
光り炫ゆれどはかなしや。

徳やむなしく、
　信やまれ。

あゝ、戀、ほこる絶望に
あはれの幸を賣るのみか。
あゝ、人、やがて倒るゝも、
快樂や、おのがものと呼ぶ
すべてを後にのこすかな。

青空はれて、
　花さよし。
晝をたのしくする夜の
來ぬ間にかはる眼の艶や、
靜けき時の去らぬ間を
汝れは夢みよ——睡眠より
かくて覺めなば泣けよかし。

さらばよ

ロバート、バーンス

一

大君のみことかしこみ、
　美し國の海邊去りしを、
大君のみことかしこみ、
　行きにしを、アイルランドに、
　行きにしを、アイルランドに、我妹子よ、

二

國民たるの義務は了へぬ、
了へぬるも甲斐こそなけれ、
戀人よ、祖國よ、さらば、
海越て行かでかなはじ、我妹子よ、
海越えて行かでかなはじ。

三

右の方、返り見しつゝ、
　外國の磯曲行く彼男、
手綱つと絞りていはく、
　とこしへの別よ、さらば、我妹子よ、
　とこしへの別れよ、さらば。

四

兵士はいくさの場ゆ、
　水兵は大洋ゆ歸れど、
愛少女ゆわれのみ去るか、
　また逢む時もあらじよ、我妹子よ、
　また逢はん時もあらじよ。

五

晝行いて夜立ちかへり
　人みながいねたる時よ、
遠征の春子を思うて
　ながき夜を泣ぞ明しぬ、後春子よ、
　ながき夜を泣きぞ明しぬ。

ブレンハイムの戰

ロバート、サウジー

一

夏のひと日の夕まぐれ、
　カスパー翁は業をへつ、
おのが伏屋の入り口に
　日をあびながら坐りけり。
かたへに小さき孫むすめ、
花など摘みて遊びけり。

二

細流の岸に遊びつゝ、
　見出でたるにや、兄の子が
何やら圓き、おほひなる
　もの轉がすを見たりけり。
その滑かに、おほひなる
圓きは何と兄ぞ來し。

三

いざや、聽かんと立てる子の
　手より翁はうけ取りつ。
かくて頭をうちふりて
　歎息もらしつ、語るらく、
さればよ、それは大勝に
斃れし人の髑髏なり。

四

なべて、こゝらにいと多し、
　あはれ、園にもありぬべし、
畑をすかんと出づるとき、
　しば〳〵鋤にかゝるなり。
さればよ、昔、大勝に
百千の人のころされぬ。

五

ありし次第を語れよと
　をさなき兄は叫びたり。

ちさき妹は不思議げの
　眼つきをかしう見上げたり。
いくさの様を語りてよ、
などて、かたみに殺しゝぞ。

六

翁は言ひぬ、佛軍を
　斬りまくりしは英軍よ。
などて、かたみに殺しゝか
　そを、われ、思ひ出でねども、
さはれ、名たゝる勝利ぞと
人々みなは語りけり。

七

ブレンハイムに父住みぬ、
　彼方小川のほとりなり。
家は燒かれてせんもなく、
　妻子を連れて遁れたり。
もしも、遁れでありもせば、
いかで、頭のあるべしや。

八

火と劍とに國あれて
　見渡すかぎり灰となり、
子をもつ母や、生れ兒や、
　多くは死にぬ。さもあれや、

すべて名たゝる勝利には
あるならはしのものなりき。

九

いくさの後の野のさまは
　身の毛もよだつばかりとよ、
百千の死骸みだれ伏し、
　日にされしとよ。さもあれや、
すべて名たゝる勝利には
續いておこるものなりき。

十

ユージン王子、マルボロー公、
高き榮譽をえたりけり。——
ちさき妹の語るらく、
　あゝ、いとわろきものなるに。——
翁は言ひぬ、いな、女の兒、
あはれ、名たゝる勝利なり。

十一

さまで、いくさに勝ちたりし
　公を人みな讃美へけり。——
をさなき兄の語るらく、
　さもあれ、何の益ありし。——
翁は言ひぬ、そは知らじ、
さはれ、名たゝる勝利なり。

虹のかげ 終

明治三十九年二月五日印刷
明治三十九年二月八日發行

英米名家詩抄第三集
定價金參拾錢

著作者 小原要逸
東京市本郷區駒込西片町十番地
發行者 山縣操
同牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者 青木弘
同牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社 秀英舍第一工場

不許複製

發行所
東京市本郷區駒込西片町十番地
電話下谷二千四百五十三番
內外出版協會

内外出版協會發兌圖書

英米名家詩抄

第一編　薄もみぢ

文學士　小野竹三譯

目次

だっふぉでぃるに…ヘリック
しのゝめ…シエレー
名殘のさうび…ムーア
づゝに…ブレーク
ゆく夏…クリスチナ、ロセッチ
幼時の住家…クレーア
聖きもの…トレンチ
秋…シエレー
母の夢…バーンス
月光…ロングフェロー
戰鬪の歌…エベ子ザー、エリオット
埋れる村…ウイルトン
鶯…テニソン
年に…シエレー
雲雀…ホグ
形見の小琴…メリー、ブラウン
夕べの景色…バットモア
れてぃーの地球儀…テニソン、ターナー
冬の眺め…シエレー
死觀…ブライアント

第二編　三人の歌女

文學士　若月保治譯註

目次

三人の歌女…メレディス
靜けき聲…テニソン
ジョージ號の沈沒…クーパー
罪なき蘆…ブレーク
小川の邊…ミルネス
不意の光…ロセッチ
彼の夕鐘…ムーア
外國…スチブンソン
箭と歌…ロングフェロー
眠れ、わが子…歌集より
稻刈乙女…チルヅチルス
哀哭の歌…シエレー
まだ識らぬ人…ハウトン
善き生涯と長き生涯…ベンジョンソン
花の死…ブライアント
幼時…
行けやさしき薔薇…ウチーラー
記念の薔薇…ブラウニング
薔薇を贈れる友に…キーツ
ウエストミンスター橋上にて…チルヅチルス

VII.

My father lived at Blenheim then,
Yon little stream hard by;
They burnt his dwelling to the ground,
And he was forced to fly:
So with his wife and child he fled,
Nor had he where to rest his head.

VIII.

With fire and sword the country round
Was wasted far and wide,
And many a childing mother then,
And new-born infant, died.
But things like that, you know, must be
At every famous victory.

IX.

They say it was a shocking sight,
After the field was won,
For many thousand bodies here
Lay rotting in the sun;
But things like that, you know, must be
After a famous victory.

X.

Great praise the Duke of Malbro' won,
And our good Prince Eugene.—
Why, 'twas a very wicked thing!
Said little Wilhelmine,—
Nay—nay—my little girl, quoth he,
It is a famous victory.

XI.

And everybody praised the Duke
Who such a fight did win,—
But what good came of it at last?
Quoth little Peterkin.—
Why, that I cannot tell, said he,
But 'twas a famous victory.

THE END

THE BATTLE OF BLENHEIM.

Robert Southey. 1774-1843.

I.

It was a summer evening,
Old Kaspar's work was done;
And he before his cottage door
Was sitting in the sun,
And by him sported on the green
His little grandchild Wilhelmine

II.

She saw her brother Peterkin,
Roll something large and round,
That he beside the rivulet,
In playing there, had found;
He came to ask what he had found,
That was so large, and smooth, and round.

III.

Old Kaspar took it from the boy,
Who stood expectant by;
And then the old man shook his head,
And with a natural sigh,
'Tis some poor fellow's skull, said he,
Who fell in the great victory.

IV.

I find them in the garden, for
There's many here about,
And often when I go to plough,
The ploughshare turns them out;
For many thousand men, said he,
Were slain in the great victory.

V.

Now tell us what t'was all about,
Young Peterkin he cries,
And little Wilhelmine looks up
With wonder-waiting eyes;
Now tell us all about the war,
And what they killed each other for.

VI.

It was the English, Kaspar cried,
That put the French to route;
But what they kill'd each other for,
I could not well make out,
But everybody said, quoth he,
That 'twas a famous victory.

Virtue, how frail it is!
Friendship too rare!
Love, how it sells poor bliss
For proud despair!
But we, though soon they fall,
Survive their joy and all
Which ours we call.

Whilst skies are blue and bright,
Whilst flowers are gay,
Whilst eyes that change ere night
Make glad the day;
Whilst yet the calm hours creep,
Dream thou—and from thy sleep
Then wake to weep.

THE FAREWELL.

Robert Burns. 1759–1796.

I.

It was a' for our rightfu' King,
We left fair Scotlands' strand;
It was a' for our rightfu' King
We e'er saw Irish land, my dear,
We e'er saw Irish land.

II.

Now a' is done that men can do,
And a' is done in vain;
My love and native land farewell,
For I maun cross the main, my dear,
For I maun cross the main.

III.

He turned him right, round about,
Upon the Irish shore;
And gae his bridle-reins a shake,
With adieu for evermore, my dear,
With adieu for evermore.

IV.

The sodger frae the wars returns,
The sailor frae the main;
But I hae parted frae my love,
Never to meet again, my dear,
Never to meet again.

V.

When day is gane, and night is come.
And a' folk bound to sleep;
I think on him that's far awa,
The lee-lang night, and weep, my dear,
The lee-lang night and weep.

But oh! that deep romantic chasm which slanted
Down the green hill athwart a cedarn cover!
A savage place! as holy and enchanted
As e'er beneath a waning moon was haunted
By woman wailing for her demon-lover!
And from this chasm, with ceaseless turmoil seething,
As if this earth in fast thick pants were breathing,
A mighty fountain momently was forced;
Amid whose swift-half-intermitted burst
Huge fragments vaulted like rebounding hail,
Or chaffy grain beneath thresher's flail;
And 'mid these dancing rocks at once and ever
It flung up momently the sacred river.
Five miles meadering with a mazy motion
Through wood and dale the sacred river ran,
Then reached the caverns measureless to man,
And sank in tumult to a lifeless ocean:
And 'mid this tumult Kubla heard from far
Ancestral voice prophesying war!

The shadow of the dome of pleasure
Floated midway on the waves;
Where was heard the mingled measure
From the fountain and the caves,
It was a miracle of rare device,
A sunny pleasure-dome with caves of ice!
A damsel with a dulcimer
In a vision once I saw:

It was an Abyssinian maid,
And on her dulcimer she played,
Singing of Mount Abora.
Could I revive within me
Her symphony and song,
To such a deep delight 'twould win me,
That with music loud and long,
I would build that dome in air,
That sunny dome! those caves of ice!
And all who heard should see them there,
And all should cry, Beware! Beware!
His flashing eyes, his floating hair!
Weave a circle round him thrice,
And close your eyes with holy dread,
For he on honey-dew hath fed,
And drunk the milk af Paradice.

MUTABILITY.

P. B. Shelley. 1792-1821.

The flower that smiles to-day
To-morrow dies;
All that we wish to stay,
Tempts and then flies;
What is this world's delight?
Lightning that mocks the night,
Brief even as bright.

Go to!" say the children,—"Up in Heaven,
Dark, wheel-like, turning clouds are all we find.
Do not mock us; grief has made us unbelieving—
We look up for God, but tears have made us blind."
Do you hear the children weeping and disproving,
O my brothers, what ye preach?
For God's possible is taught by His world's loving—
And the children doubt of each.

XII.

And well may the children weep before you;
They are weary ere they run;
They have never seen the sunshine, not the glory
Which is brighter than the sun:
They know the grief of man, but not the wisdom;
They sink in man's despair, without its calm—
Are slaves, without the liberty in Chrisdom,—
Are martyrs, by the pang without the palm,—
Are worn, as if with age, yet unretrievingly
No dear remembrance keep,—
Are orphans of the earthly love and heavenly:
Let them weep! let them weep!

XIII.

They look up, with their pale and sunken faces,
And their look is dread to see,
For they mind you of their angels in their places,
With eyes meant for Deity;—

"How long," they say, "how long, cruel nation,
Will you stand, to move the world, on a child's heart,—
Stifle down with a mailed heel its palpitation,
And tread onward to your throne amid the mart?
Our blood splashes upward, O our tyrants,
And your purple shows your path;
But the child's sob curseth deeper in the silence
Than the strong man in his wrath!"

KUBLA KHAN;

OR,

A VISION IN A DREAM.

A FRAGMENT.

S. T. Coleridge.

In Xanadu did Kubla Khan
A stately pleasure-dome decree:
Where Alph, the sacred river, ran
Through caverns measureless to man
Down to a sunless sea.
So twice five miles of fertile ground
With walls and towers were girdled round:
And there were gardens bright and sinuous rills
Where blossomed many an incense-bearing tree;
And here were forests ancient as the hills,
Enfolding sunny spots of greenery.

Turns the sky in the high window blank and reeling—
Turns the long light that droppeth down the wall—
Turn the black flies that crawl along the ceiling—
All are turning, all the day, and we with all,—
All, all day, the iron wheels are drowing,
And sometimes we could pray,
'O ye wheels,' (breaking out in a mad moaning)
'Stop! be silent for to-day!'"

VIII.

Ay! be silent! Let them hear each other breathing
For a moment, mouth to mouth—
Let them touch each other's hands, in a fresh wreathing
Of their tender human youth!
Let them fell that this cold metalic motion
Is not all the life God fashions or reveals—
Let them prove their inward souls against the notion
That they live in you, or under you, O wheels!—
Still, all day, the iron wheels go onward,
Grinding life down from its mark;
And the children's souls, which God is calling sunward,
Spin on blindly in the dark.

IX.

Now, tell the poor young children, my brothers,
To look up to Him and pray—
So the blessed One, who blesseth all the others,
Will bless them another day.

They answer, "Who is God that He should hear us,
While the rushing of the iron wheels is stirred?
When we sob aloud, the human creatures near us
Pass by, hearing not, or answer not a word!
And *we* hear not (for the wheels in their resounding)
Strangers speaking at the door:
Is it likely God, with angel singing round Him,
Hears our weeping any more?

X.

"Two words, indeed, of praying we remember;
And at midnights hour of harm,
'Our Father,' looking upward in the chamber.
We say softly for a charm.
We know no other word except, 'Our Father,'
And we think that, in some pause of angels' song,
God may pluck them with the silence sweet to gather,
And hold hoth within His right hand which is strong.
'Our Father!' If He heard us, He would surely
(For they call Him good and mild)
Answer, smiling down the steep world very purely,
'Come and rest with me, my child.'

XI.

"But no!" say the children, weeping faster,
"He is speechless as a stone;
And they tell us, of His image is the master
Who commands us to work on.

Ask the old why they weep, and not the children,
For the outside earth is cold,—
And we young ones stand without, in our bewildering,
And the graves are for the old.

IV.

"True," say the young children, "it may happen
That we die before our time.
Little Alice died last year—the grave is shapen
Like a snowball, in the rime.
We looked into the pit prepared to take her—
Was no room for any work in the close clay;
From the sleep wherein she lieth none will wake her,
Crying, 'Get up, little Alice! it is day!'
If you listen by that grave, in sun and shower,
With your ear down, little Alice never cries!—
Could we see her face, be sure we should not know her,
For the smile has time for growing in her eyes,—
And merry go her moment, lulled and stilled in
The shroud, by the kirk-chime!
It is good when it happens," say the children,
"That we die before our time."

V.

Alas, alas, the children! they are seeking
Death in life, as best to have!
They are binding up their hearts away from breaking,
With a cerement from the grave.

Go out, children, from the mine and from the city—
Sing out, children, as the little thrushes do—
Pluck your handfuls of the meadow-cowslips pretty—
Laugh aloud, to feel your fingers let them through!
But they answer, "Are your cowslips of the meadows
Like our weeds anear the mine?
Leave us quiet in the dark of the coal-shadows,
From your pleasures fair and fine!

VI.

"For oh," say the children, "we are weary,
And we cannot run or leap—
If we cared for any meadows, it were merely
To drop down in them and sleep.
Our knees tremble sorely in the stooping—
We fall upon our faces, trying to go;
And, underneath our heavy eyelids drooping,
The reddest flower would look as pale as snow.
For, all day, we drag our burden tiring,
Through the coal-dark, under-ground—
Or, all day, we drive the wheels of iron
In the factories, round and round.

VII.

"For, all day, the wheels are drowing, turning,—
Their wind comes in our faces,—
Till our hearts turn,—our head, with pulses burning,
And the walls turn in their places—

Sleep, little ladies!
Wake not soon!
Echo on echo
Dies to the moon.

Two bright stars
Peep'd into the shell.
"What are they dreaming of?
Who can tell?"

Started a green linnet
Out of the croft;
Wake, little ladies,
The sun is aloft.

THE CRY OF THE CHILDREN.

E. B. Browning.

I.

Do ye hear the children weeping, my brothers,—
Ere the sorrow comes with years?
They are leaning their young heads against their mothers,—
And *that* cannot stop their tears.
The young lambs are bleating in the meadows;
The young birds are chirping in the nest;
The young fawns are playing with the shadows;
The young flowers are blowing toward the west—

But the young, young children, O my brothers,
They are weeping bitterly!—
They are weeping in the playtime of the others,
In the country of the free.

II.

Do you question the young children in the sorrow,
Why their tears are falling so?—
The old man may weep for his to-morrow
Which is lost in Long Ago—
The old tree is leafless in the forest—
The old year is ending in the frost—
The old wound, if stricken, is the sorest—
The old hope is hardest to be lost:
But the young, young children, O my brothers,
Do you ask them why they stand
Weeping sore before the bosoms of their mothers,
In our happy Fatherland?

III.

They look up with their pale and sunken faces,
And their looks are sad to see,
For the man's grief abhorrent, draws and presses
Down the cheeks of infancy—
"Your old earth," they say, "is very dreary;"
"Our young feet," they say, "are very weak!
Few paces have we taken, yet are weary—
Our grave-rest is very far to seek.

XV.

And fast through the midnight dark and drear,
Through the whistling steel and snow,
Like a sheeted ghost, the vessel swept
Towards the reef of Norman's Woe.

XVI.

And ever the fitful gusts between
A sound came from the land;
It was the sound of the trampling surf,
On the rocks and the hard sea-sand.

XVII

The breakers were right beneath her bows,
She drifted a dreary wreck,
And a whooping billow swept the crew
Like icicles from her deck.

XVIII.

She struck where the white and fleecy waves
Looked soft as carded wool,
But the cruel rocks, they gored her side
Like the horns of an angry bull.

XIX.

Her rattling shrouds, all sheathed in ice,
With the masts went by the board;
Like a vessel of glass, she stove and sank,
Ho! ho! the breakers roared!

XX.

At daybreak, on the bleak sea-beach,
A fisherman stood aghast,
To see the form of a maiden fair,
Lashed close to a drifting mast.

XXI.

The salt sea was frozen on her breast,
The salt tears in her eyes;
And he saw her hair, like the brown sea-weed,
On the billows fall and rise.

XXII.

Such was the wreck of the Hesperus,
In the midnight and the snow!
Christ save us all from a death like this,
On the reef of Norman's Woe!

MINNIE AND WINNIE.

Lord Tennyson 1809-1292.

Minnie and Winnie
Slept in a shell.
Sleep, little ladies!
And they slept well.

Pinks was the shell within,
Silver without;
Sounds of the great sea
Wander'd about.

V.

"Last night, the moon had a golden ring,
And to-night no moon we see!"
The skipper, he blew a whiff from his pipe,
And a scornful laugh laughed he.

VI.

Colder and louder blew the wind,
A gale from the north-east;
The snow fell hissing in the brine,
And the billows frothed like yeast.

VII.

Down came the storm, and smote amain.
The vessel in its strength;
The shuddered and paused, like a frighted steed,
Then leaped her cable's length.

VIII.

"Come hither! come hither! my little daughter,
And do not tremble so;
For I can weather the roughest gale
That ever wind did blow."

IX.

He wrapped her warm in his seamen's coat
Against the stinging blast;
He cut a rope from a broken spar,
And bound her to the mast.

X.

"O father! I hear the church-bells ring,
O say what may it be?"
"'Tis a fog-bell on a rock-bound coast!"
And he steered for the open sea."

XI.

"O father! I hear the sound of guns,
O say what may it be?"
"Some ship in distress, that cannot live
In such an angry sea!"

XII.

"O father! I see a gleaming light,
O say what may it be?"
But the father answered never a word,—
A frozen corpse was he.

XIII.

Lashed to the helm, all stiff and stark,
With his face turned to the skies,
The lantern gleamed through the gleaming snow
On his fixed and glassy eyes.

XIV.

Then the maiden clasped her hands and prayed
That saved she might be;
And she thought of Christ, who stilled the wave
On the Lake of Galilee.

Yet on the rose's humble bed
The sweetest dews of night are shed,
As if she wept the waste to see—
But none shall weep a tear for me!

II.

My life is like the autumn leaf,
That trembles in the moon's pale ray,
Its hold is frail—its date is brief,
Restless—and soon to pass away!
Yet, ere that leaf shall fall and fade,
The parent tree will mourn its shade,
The wind bewail the leafless tree,
But none shall breathe a sigh for me!

III.

My life is like the print which feet
Have left on Tampa's desert strand;
Soon as the rising tide shall beat,
All trace will vanish from the sand;
Yet, as if grieving to efface
All vestige of the human race,
On that lone shore loud moans the sea,
But none, alas! shall mourn for me!

THE WRECK OF THE HESPERUS.

H. W. Longfellow. 1807—1882.

I.

It was the schooner Hesperus,
That sailed the wintry sea;
And the skipper had taken his little daughter,
To bear him company.

II.

Blue were her eyes as the fairy-flax,
Her cheek like the dawn of day,
And her bosom white as the hawthorn buds
That ope in the month of May.

III.

The skipper he stood beside the helm,
His pipe was in his mouth,
And he watched how the veering flaw did blow
The smoke now west, now south.

IV.

Then up and spoke an old sailor,
Had sailed the Spanish Main,
"I pray thee put into yonder port,
For I fear a hurricane.

I saw thee smile—the sapphire's blaze
Beside thee ceased to shine;
It could not match the living rays
That filled that glance of thine.

As clouds from yonder sun receive
A deep and mellow dye,
Which scarce the shade of coming eve
Can banish from the sky,
Those smiles unto the moodiest mind
Their own pure joy impart;
Their sunshine leaves a glow behind
That lightens o'er the heart.

THE ROSE.

S. T. Coleridge.

As late each flower that sweetest blows
I plucked, the garden's pride:
Within the petals of a rose
A sleeping Love I spied.

Around his brows a beamy wreath
Of many a lucent hue;
All purple glowed his cheek, beneath,
Inebriate with dew.

I softy seized th' unguarded power,
Nor scared his balmy rest;
And placed him, caged within the flower,
On spotless Sara's breast.

But when unweeting of the guile
Awoke the prisoner sweet,
He struggled to escape awhile
And stamped his faery feet.

Ah! soon the soul-entrancing sight;
Subdued th' impatient boy!
He gazed! he thrilled with deep delight!
Then clapped his wings for joy.

And oh! he cried—'Of magic kind
What charms this throne endear!
Some other Love let Venus find—
I'll fix *my* empire here!

MY LIFE IS LIKE THE SUMMER ROSE.

Richard Henry Wilde. 1789-1847.

I.

My life is like the summer rose.
That opens to the morning sky,
But ere the shades of evening close,
Is scattered on the ground—to die

"Pipe a song about a Lamb!"
So I piped with merry cheer.
"Piper, pipe that song again!"
So I piped: he wept to hear.

"Drop thy pipe, thy happy pipe;
Sing thy song of happy cheer!"
So I sung the same again,
While he wept with joy to hear.

"Piper, sit thee down and write
In a book that all may read."
So he vanished from my sight;
And I plucked a hollow reed,

And I made a rural pen,
And I stained the water clear,
And I wrote my happy songs
Every child may joy to hear.

THE APOLOGY.

R. Waldo Emerson. 1803-1882.

Think me not unkind and rude,
That I walk alone in grove and glen;
I go to the god of the wood
To fetch his word to men.

Tax not my sloth that I
Fold my arms beside the brook;
Each cloud that floated in the sky
Writes a letter in my book.

Ghide me not, laborious band,
For the idle flowers I brought;
Every aster in my hand
Goes home loaded with a thought.

There was never mystery
But 'tis figured in the flowers;
Was never secret history
But birds tell it in the bowers.

One harvest from thy field
Homeward brought the oxen strong
A second crop thy acres yield,
Which I gather in a song.

I SAW THEE WEEP.

Lord Byron. 1788-1824.

I saw thee weep—the big bright tear
Came o'er that eye of blue:
And then methought it did appear
A violet dropping dew:

"I AM PLEASED, AND YET I'M SAD."

H. Kirke White. 1785-1806.

I.

When twilight steals along the ground,
And all the bells are ringing round,
One, two, three, four, and five ;
I at any study window sit,
And wrapt in many a musing fit,
To bliss am all alive.

II.

But though impressions calm and sweet,
Thrill round my heart a holy heat,
And I am inly glad ;
The tear-drop stand in either eye,
And yet I cannot tell thee why,
I am pleased, and yet I'm sad.

III.

The silvery rack that flies away,
Like mortal life or pleasure's ray,
Does that disturb my breast ?
Nay what have I, a studious men,
To do with life's unstable plan,
Or pleasure's fading vest ?

IV.

Is it that here I must not stop,
But o'er yon blue hills' woody top,
Must bend my lonely way ?
Now, surely no, for give but me
My own fire-side, and I shall be
At home where'er I stray.

V.

Then is it that yon steeple there,
With music sweet shall fill the air,
When thou no more canst hear ?
Oh no ! oh no ! for then forgiven,
I shall be with my God in Heaven,
Released from every fear.

VI.

Then whence it is I cannot tell,
But there is some mysterious spell
That holds me when I'm glad ;
And the tear-drop fills my eye,
When yet in truth I know not why,
Or wherefore I am sad.

REEDS OF INNOCENCE.

William Blake. 1759-1828.

Piping down the valleys wild,
Piping songs of pleasant glee,
On a cloud I saw a child,
And he laughing said to me :

"Rome shall perish—write that word
In the blood that she has spilt;
Perish, hopeless and abhorr'd,
Deep in ruin as in guilt.

"Rome, for empire far renown'd,
Tramples on a thousand states;
Soon her pride shall kiss the ground—
Hark! the Gaul is at her gates!

"Other Romans shall arise,
Heedless of a soldier's name;
Sounds, not arms, shall win the prize,
Harmony the path to fame.

"Then the progeny that springs
From the forests of our land,
Arm'd with thunder, clad with wings,
Shall a wider world command.

"Regions Cæsar never knew
Thy posterity shall sway;
Where his eagles never flew,
None invincible as they."

Such the bard's prophetic words,
Pregnant with celestial fire,
Bending as he swept the chords
Of his sweet but awful lyre.

She, with all a monarch's pride,
Felt them in her bosom glow;
Rush'd to battle, fought, and died;
Dying hurl'd them at foe.

"Ruffians, pitiless as proud,
Heaven awards the vengeance due;
Empire is on us bestow'd,
Shame and ruin wait for you."

TO MARY RUSSELL MITFORD.

IN HER GARDEN.

E. B. Browning.

What time I lay these rhymes anear thy feet,
Benignant friend! I will not proudly say
As better poets use, "These *flowers* I lay,"
Because I would not wrong thy roses sweet,
By spoiling so their name. And yet, repeat
Thou, overleaning them this spring time day,
With heart as wide to love as theirs to May,—
"Low-rooted verse may reach some heavenly heat,
Even like my blossoms, if as nature-true,
Though not as precious." Thou art unperplext,
Dear friend, in whose dear writings drops the dew
And blow the natural airs; thou, who art next
To nature's self in cheering the worlds' view,
To preach a sermon on so known a text!

Ah, Sweet, be free to love and go!
For if I do not hear thy foot,
The frozen river is as mute,—
The flowers have dried down to the root;
And why, since these be changed since May,
Shouldst *thou* change less than *they*?

II.

And slow, slow, as the winter snow,
The tears have drifted to mine eyes;
And my poor cheeks, five months ago,
Set blushing at thy praises so,
Put paleness on for a disguise.
Ah, Sweet, be free to praise and go!
For if my face is turned so pale,
It was thine oath that first did fail,—
It was thy love proved false and frail!
And why, since these be changed, enow,
Should *I* change less than *thou*?

EPITAPH ON AN INFANT.

S. T. Coleridge. 1772–1832.

Its balmy lips the infant blest
Relaxing from its mother's breast,
How sweet it heaves the happy sigh
Of innocent satiety!

And such my infant's latest sigh!
O tell, rude stone! the passer by,
That here the pretty babe doth lie,
Death sang to sleep with Lullaby.

Ere sin could blight or sorrow fade,
Death came with friendly care;
The opening bud to Heaven conveyed
And bade it blossom there.

BOADICEA.

William Cowper. 1731—1800.

When the British warrior queen,
Bleeding from the Roman rods,
Sought, with an indignant mien,
Counsel of her country's gods,

Sage beneath the spreading oak
Sat the Druid, hoary chief;
Every burning word he spoke
Full of rage, and full of grief.

"Princess! if our aged eyes
Weep upon thy matchless wrongs,
'Tis because resentment ties
All the terrors of our tongues.

For sore dismayed through storm and shade,
His child he did discover:
One lovely hand she stretched for aid,
And one was round her lover.

"Come back! come back!" he cried in grief,
"Across this stormy water;
And I'll forgive your Highland chief,
My daughter!—Oh! my daughter!"

'Twas vain: the loud waves lashed the shore,
Return or aid preventing;
The waters wild went o'er his child,
And he was left lamenting.

THREE FISHERS.

Rev. Charles Kingsley. 1819–1875.

Three fishers went sailing out into the west,
Out into the west, as the sun went down,
Each thought of the woman who loved him best,
And the children stood watching them out of the town;
For men must work, and women must weep,
And there's little to earn, and many to keep,
Though the harbour-bar be moaning.

Three wives sat up in the lighthouse tower,
And they trimmed the lamps as the sun went down;
They looked at the squall, and they looked at the shower,
And the night-rack came rolling up ragged and brown;
But men must work, and women must weep,
Though storms be sudden, and waters deep,
And the harbour-bar be moaning.

Three corpses lie out in the shining sands,
In the morning gleam, as the tide goes down,
And the women are weeping and wringing their hands,
For those who will never come home to the town.
For men must work, and women must weep,
And the sooner it's over, the sooner to sleep,
And good-bye to the bar and its moaning.

CHANGE UPON CHANGE.

E. B. Browning. 1806–1861.

I.

Five months ago, the stream did flow,
The lilies bloomed along the edge;
And we were ligering to and fro,—
Where none will track thee in this snow,
Along the stream, beside the hedge.

LORD ULLIN'S DAUGHTER.

Thomas Campbell. 1777-1844.

A chieftain to the Highlands bound,
Cries, "Boatman, do not tarry!
And I'll give thee a silver pound
To row us o'er the ferry."

"Now, who be ye would cross Lochgyle,
This dark and stormy water?"
"Oh! I'm the chief of Ulva's isle,
And this Lord Ullin's daughter.

"And fast before her father's men
Three days we've fled together;
For, should he find us in the glen,
My blood would stain the heather.

"His horsemen hard behind us ride;
Should they our steps discover,
Then who will cheer my bonny bride
When they have slain her lover?"

Out spoke the hardy island wight,
"I'll go, my chief—I'm ready:—
It is not for your siiver bright;
But for your winsome lady:

"And by my word, the bonny bird
In danger shall not tarry;
So, though the waves are raging white,
I'll row you o'er the ferry."

But this the storm grew loud apace,
The water-wraith was shrieking;
And in the scowl of heaven each face
Grew dark as they were speaking.

But still as wilder blew the wind,
And as the night grew drearer,
Adown the glen rode armed men,
Their trampling sounded nearer.

"Oh! haste thee, haste!" the lady cries,
"Though tempests round us gather
I'll meet the raging of the skies,
But not an angry father."

The boat has left a stormy land,
A stormy sea before her,—
When, Oh! too strong for human hand,
The tempest gathered o'er her.

And still they rowed amidst the roar
Of waters fast prevailing;
Lord Ullin reached that fatal shore,
His wrath was changed to wailing.

RUTH.

Thomas Hood. 1798-1845.

She stood breast high amid the corn,
Clasped by the golden light of morn,
Like the sweetheart of the sun,
Who many a glowing kiss had won.

On her cheek an autumn flush
Deeply ripened--such a blush
In the midst of brown was born—
Like red poppies grown with corn.

Round her eyes her tresses fell,
Which were blackest none could tell,
But long lashes veiled a light
That had else been all too light.

And her hat, with shady brim,
Made her tressy forehead dim:—
Thus she stood amid the stooks,
Praising God with sweetest looks:—

Sure, I said, Heav'n did not mean
Where I reap thou shouldst but glean,
Lay the sheaf adown and come
Share my harvest and my home.

Ruth

CONTENTS.

Ruth..... *Thomas Hood* .. 1

Lord Ullin's Daughter..... *Thomas Campbell*... 2

Three Fishers ..... *Rev. Charles Kingsley*... 4

Change upon Change.....*E. B. Browning* .. 5

Epitaph on an Infant..... *S. T. Coleridge*... 6

Boadicea ..... *William Cowper*... 7

To Mary Russell Mitford..... *E. B. Browning*... 9

"I am pleased, and yet I'm sad."..... *H. Kirke White*... 10

Reeds of Innocence ..... *William Blake*... 11

The Apology..... *R. Waldo Emerson* .. 12

I saw thee weep..... *Lord Byron* .. 13

The Rose..... *S. T. Coleridge*... 14

My Life is like the Summer Rose...*Richard H. Wilde*... 15

The Wreck of the Hesperus ..... *H. W. Longfellow*... 17

Minnie and Winnie..... *Lord Tennyson*... 21

The Cry of the Children..... *E. B. Browning*... 22

Kubla Khan..... *S. T. Coleridge*... 29

Mutability..... *P. B. Shelley*... 31

The Farewell..... *Robert Burns*... 32

The Battle of Blenheim..... *R. Southey*... 34